

# 深イ～話！

No.59

——筒井正浩（株式会社ゆめさぼーと代表）——

以前、大阪の履正社<sup>りせいしゃ</sup>高校の野球部でメンタルコーチをしていたことがあります。コージ（仮名）という子がいて、彼は賢くて、肩も強く、パワーのある子でした。ただ、体が大きいがためにちょっと動きが鈍かったので、練習試合にすら出させてもらうチャンスがないまま、3年生になりました。

それでも彼は腐ることなく、グラウンド整備とか、裏方を頑張っていました。特に彼はバッティングマシンの高さ調整が天才的にうまかった。

また、練習試合を応援に来た観客の方に対しても、敵・味方関係なく、「ここは日が差すので、あっちのほうが涼しいですよ」とか「椅子どうぞ」と声をかけて、試合中ずっと周りに気を配る子でした。

3年生最後の夏の大会の背番号発表の日。その日は生徒のご両親も見に来るほど大切な日です。次々に名前が呼ばれる中、「背番号15番」と監督が言った後、コージの名前が呼ばれたんです。

グラウンドで同級生たちが「ウオー！」と叫びました。みんな自分のことのように喜び、「よかったな、よかったな」ってコージに声を掛けました。他の生徒のご両親までもが泣きながら、コージのご両親に「おめでとう」と言っていました。

「こいつ、どれだけ愛されてんのか」と僕は思いました。その光景は普段のコージの姿を物語っていました。

背番号15番、サードの控え。この背番号をコージと争っていたのが、1年生のケイスケ（仮名）という男でした。彼は後に大活躍する子です。

背番号をもらった次の日もコージはバッティングマシンの調整をしていました。

「お前、もう背番号もらったんだから、こんなことせんでもいいぞ。練習に入れ」と言うのに、「これだけやらしてください。すぐ練習に入りますから」と、バッティングマシンのハンドルを回しながら高さを調整していました。

その下で、マシンが反動で動かないように、親指より太い杭をケイスケが大きなハンマーでガンガン打ちつけていました。次の瞬間、ケイスケが振り上げたハンマーが、コージの指をハンドルとの間で挟んでしまったんです。

一瞬嫌な空気が流れました。僕は何が起こったか分からず、マウンドに走りました。コージは左手を押さえてうずくまり、その横でケイスケは謝ることもできないくらい真っ青になって震えていました。

あっという間にコージの左手が腫れていきました。すぐに氷で冷やして、いつもお世話になっている整形外科に向かうために、彼を駐車場まで連れて行って車に乗せようとしたら、コージが「ケ



イスケを呼んでください。」と言うんです。僕が駐車場から「ケイスケ！」と叫んだら、ケイスケは走ってきて、「すみません、すみません」と泣いていました。コージは言いました。「ケイスケ、ごめん。お前が下でハンマー打っていたの知ってたんや」

実はハンマーを打っているときはハンドルを握ったらあかんというルールがあったんです。「でも、お前が打っているの知っていたけど、俺、早く練習がしたかったんや。俺が焦ってハンドルを触ってもうてん。ごめんな」ってコージは謝るんです。もちろんケイスケは「いえいえ、すみません。僕の不注意です。」って謝っていました。

そして、駐車場を出る瞬間、コージは「ケイスケ、俺の分までがんばってな」とケイスケにはっきり言ったんです。

コージはこの時期にこんなけがをしたらベンチ入りから外され、背番号15番はケイスケが付けることになるだろうと理解したんだと思います。

病院に着くまで僕は涙が止まりませんでした。僕は生徒にメンタル指導をしてきたけど、僕のほうが生徒から教えてもらうことがたくさんありました。

夏の大会が終わったある日、ある大学のアメリカン・フットボールの監督が履正社高校の野球部を訪ねてきました。アメフトにはクォーターバックというポジションがあります。野球でいったらピッチャーとキャッチャーを併せもつ、要のポジションです。作戦を考え、すべての指示を出し、決定的なパスを出す。それだけ大変なポジションだからこそ、適した選手がなかなかいない。そこで野球をしている子から使いそうな子がいないか、大学の監督が探しに来たんです。

「頭がよくて、肩が強くて、体が大きい子いませんか？」と。野球部の監督はコージのこれまでのエピソードを話しながら彼を推薦しました。その大学の監督は、履正社高校の他にもいくつかの野球部を回る予定でしたが、コージの話を聞くと、「その子に決めます。そんな子が欲しかったんです」と言ったんです。

コージはその大学に入り、2回生のときからクォーターバックのレギュラーになりました。4回生では西日本代表のキャプテンに選ばれ、今は実業団チームで大活躍しています。

高校3年のあのケガをした時、コージはケイスケを責めることもできたと思います。ケイスケを怒っても誰もコージを責めなかったと思います。でも、コージは違った。いつも「自分が原因や」と考える子だったんです。

彼は「あれがあったからあかんかった」の人生ではなく、「あれがあったからこそ」の人生にできる子だったのです。どんなときでも人を思い、人のために動いていたコージだからこそ、いつの間にか自分も輝く道を歩いていたんだと思います。